# 尚家伝来「黄色地紅型模様図案」についての一考察

篠原 あかね

Consideration about the design of yellow back ground of bingata transmission from Ryukyu royal family.

Akane SHINOHARA

沖縄県立博物館・美術館, 博物館紀要 第11号別刷 2018年3月30日

Reprinted from the Bulletin of the Museum, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, No.11 March, 2018

# 尚家伝来「黄色地紅型模様図案」についての一考察

篠原あかね1)

Consideration about the design of yellow back ground of bingata transmission from Ryukyu royal family.

Akane SHINOHARA<sup>1)</sup>

#### 1. はじめに

紅型の起源や制作体制については未だ明らかに なっていないが、手掛かりとなる資料がいくつか残 されている。そのひとつが、黄色地紅型模様図案 図 1である。(以下、図案という。) これは鎌倉芳太 郎が戦前にガラス乾板で撮影したモノクロ写真で確 認できるもので、残念ながら実物は現存していない。 しかしこの図案を元に絵師が描いたデザインを紺屋 が衣裳に染めていたことが明らかになった。王国時 代に紅型がどのように製作されていたのかを知る上 で重要な資料である。銘がないため制作年や作者は 不詳だが、那覇市所蔵の琉球国王尚家関係資料「白 地牡丹尾長鳥流水菖蒲文紅型木綿衣裳」図 2や「黄 色地牡丹尾長鳥流水菖蒲文紅型縮緬袷衣裳」図 3と 類似しているので、これらの衣裳の下絵として制作 されたと考えられている(図1、2は本稿付録として 130、131頁に比較写真を掲載している)。



図3 黄色地牡丹尾長鳥流水菖蒲文紅型縮緬袷衣裳 (那覇市歴史博物館蔵)

これまで上記2領の紅型衣裳が説明される際には、頻繁に図案の存在が示されてきたが、図案そのものについての研究は鎌倉芳太郎の基礎研究以降ほとんどされてこなかった。その理由は、現物が戦禍で失われてしまったため写真以外に知ることができなかったからだろう。本稿ではこの図案を中心に、紅型衣裳ついて考察してみたい。まず先行研究をもとに図案の概要を述べ、次に図案に描かれているモチーフならびに構成について考察し、最後に琉球王国時代の絵師の花鳥図との比較から、図案の作者について推察する。

## || 黄色地紅型模様図案について

鎌倉芳太郎によると、王家には王妃着用の黄色地紅型衣裳の図案が3領伝えられていた。「2領は肩から腰にかけての牡丹尾長鳥模様がほぼ一致しており、裾の模様のみ異なる。一方が流水と菖蒲で、もう一方には籬と菊が描かれている。残りの1領は肩から腰にかけて枝垂桜と燕が描かれ、裾には流水と菖蒲の模様が二重に配されている。本稿では、図案に対応する衣裳が現存している牡丹と尾長鳥、流水、菖蒲が描かれた図案を中心に考察することとする。『

鎌倉芳太郎によると、図案は楮紙を実寸大の衣裳の寸法に張り合わせたものだという。写真で確認すると襟の合わせまで実際の衣裳と同じように作られていることがわかる。表と裏それぞれに模様を線描きし、要所ごとに彩色されている。彩色には岩絵の具が用いられていたということである。表の肩の牡丹を見ると、左側は線描きのみと見受けられるが、右側はいくつかの色に塗り分けられて、さらに文字

<sup>&</sup>lt;sup>1)</sup> 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1 Okinawa Prefectural Museum & Art Museum, 3-1-1 Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006 Japan

が書かれた付箋のようなものが貼られている。紺屋 で色を差す際の指針としたものだろう。鎌倉芳太郎 は、これらの図案を絵画的素養のある一流の絵師の 作であると推察し、従来の型を受け継ぐだけでなく、 独創的な表現が意図されたと指摘する。その構成は 今日「鎖大模様型(クサリウフムユウガタ)」とよ ばれるもので、絵画的な表現がされていることがわ かる。また図案はすべて黄色地だという。図案(牡 丹尾長鳥流水に菖蒲) 図1は、那覇市所蔵の琉球国 王尚家関係資料「白地牡丹尾長鳥流水菖蒲文紅型木 綿衣裳」図2や「黄色地牡丹尾長鳥流水菖蒲文紅型 縮緬袷衣裳」図3と類似している。特に「白地牡丹 尾長鳥流水菖蒲文紅型木綿衣裳」図2は地色こそ違 うものの、鳥の配置から菖蒲の葉の動きまで模様が ほぼ一致しており、図案を元に衣裳が作られたこと が明らかである。王家の人々が着る衣裳の中でも格 式の高い紅型衣裳の図案は、王府納殿の貝摺奉行所 の絵師によって描かれ、納殿の管理のもとに紺屋で 型彫りや染織が進められたといわれている。図案も 王家の女性が着るために制作されたものだと考えら れている。

一 黄色地紅型模様図案に描かれている模様について 図案の模様構成は大きく肩、身、裾に分けられる。 以下でそれぞれの模様について述べる。

#### ①肩の模様

まず裏面・肩から見ると、背から裾に向かって大 きく牡丹が描かれている。波打つような立体感のあ る花弁が特徴的で、背縫いにまたがる大きな牡丹の み中心に蕊が描かれている。この大きい牡丹を囲む ように四方に葉が描かれ、さらに袖に向かって左右 対称に枝垂れるように花枝が伸びている。牡丹は立 木であるため本来の咲き方とは異なるが、絵師の工 夫の結果、このような牡丹が描かれたと考えられる。 牡丹は百花の王ともいわれ富を象徴する花である。 東南アジアを中心に好まれたモチーフの一つで、紅 型には様々な表現で頻繁に描かれている。また尚家 伝来の漆器に牡丹唐草が非常に多いことからも王家 で牡丹が好まれたことが窺える。図案に描かれた枝 垂れるような牡丹は唐草風にも感じられ、漆器など 貝摺奉行所で制作された他の工芸品との関係が興味 深い。

#### ②身の模様

牡丹の下、身の部分の空白を埋めるように鳥が配されている。正面を向く姿や横向きに飛ぶ姿、後ろ姿などいくつかのバリエーションが確認できる。従来「尾長鳥」と呼ばれるこの鳥が表現された紅型衣裳は王家伝来の衣裳以外にも多く存在する<sup>※</sup>。鎌倉芳太郎が収集した型紙の中にも同様の「尾長鳥」図4があることから、当時好まれてたびたび制作されていたとわかる。一般的に「尾長鳥」は特定の種類の鳥を指すものではなく、広い意味で長い尾羽を持つ姿の美しい鳥を示している。同じように長い尾羽を持ち、吉祥的な意味を含む神聖な鳥としては鳳凰が挙げられるが、華美な鳳凰の姿は場合によっては華やか過ぎて避けられることもあったのだろう。



図4 尾長鳥模様白地型紙(沖縄県立芸術大学蔵)

鳳凰に代わるものとして、鳥を理想化・抽象化してできた縁起の良い文様が「尾長鳥」であると考えられる。図案に描かれた「尾長鳥」をみてみると、オナガのような体つきでしっかりとした翼を持ち、頭には小さな冠羽が見受けられる。尾羽10枚のうち2枚は体長と同じくらい長い。筆者が調べたところ、この「尾長鳥」の特徴は、サンジャクという実在の鳥に非常によく似ている。サンジャクは約66cmの体長に対して45cm前後の長い尾羽を持つことが特徴である。頭部と喉は黒色で、後頭部に白色ないし淡青色の大きな斑がある。また背から尾は紫がかった灰青色で、腹部は白色である。長い尾の先端部には白斑があり、赤いくちばしと脚が特徴である。中国河北省以南などに生息し、中国では飼鳥として

愛玩されることもあった。また日本にも輸入されたと伝えられており、江戸時代に刊行された訓蒙図彙 \*\*や、和漢三才図会\*にも「山鵲」図5としてその姿が掲載されている。和漢三才図会の挿絵に描かれたサンジャクと、図案の「尾長鳥」は非常に似通っている。また実際のサンジャクと「白地牡丹尾長鳥流水菖蒲文紅型木綿衣裳」の「尾長鳥」の色彩を比べると黒い喉元と青い体、赤い嘴と脚、尾の白班などいくつも共通点がある。中国では飼鳥とされるほど馴染みがあり、また日本でも辞典で紹介される程に知られていたサンジャクが、何らかの形で絵師の目にとまった可能性は十分あると言えるのではないだろうか。





図5 山鵲 (和漢三才図会) 寺島良安編「和漢三才図会、上巻」(日本随筆大成刊行会、 1928) より転載

また中国や日本においてサンジャクは花鳥画のモチーフとしてしばしば取りあげられた。その際サンジャクは、綬帯鳥(含綬鳥)として吉祥的な意味を込められることが多くあったようだ。綬とは官職を表す印を身につけるための組紐を指しており、綬帯鳥は出世に繋がる吉祥的な意味を含む鳥として好まれた。 「この綬帯鳥が中国もしくは日本から琉球に渡り、吉祥的な意味を持った紅型の「尾長鳥」に置き換わったとも考えられる。

また日本において綬帯鳥が描かれた絵画を参照すると、サンジャクと良く似た姿でありながらもサンジャクにはない特徴を一つ持っていることがわかった。それは頭部の冠羽である。サンジャクは冠羽を持たないが、綬帯鳥として描かれる場合は必ずと言って良いほど冠羽が描かれる。冠羽を描き、実在のサンジャクとは少し異なる異形な姿で表すことで、綬帯鳥としての吉祥性と神秘性を強めたと考え

られる。

改めて図案の「尾長鳥」を見てみると、頭部には 冠羽が描かれている。これは琉球の絵師がサンジャ クに綬帯鳥の意味を込めて描いたと言えるのではな いだろうか。王家の格式高い衣裳の模様として用い られたことから、琉球において綬帯鳥は縁起の良い 神聖な鳥として受容され、好まれていたと考えられ る。さらに、王国時代に描かれた花鳥図の「尾長鳥」 の中には綬帯鳥の特徴をもつものが多く存在する。 このことから、王府で花鳥図を描いていた絵師が図 案を描いたことがうかがえる。図案を描いた絵師に ついては後の章で考察する。

### ③裾の模様

図1裾には流水と菖蒲が描かれている。肩の牡丹 が装飾的且つ左右対称であるのに対して、裾の菖蒲 は写実的且つ左右非対称である。図案に描かれてい る「流水に菖蒲」や「籬に菊」などの模様はいうま でもなく日本的なモチーフである。「流水に菖蒲」 は伊勢物語に出典が求められ、日本の工芸品には八 橋とともに表現される例が多い。これまでの先行研 究で、紅型の模様は琉球固有の風物がほとんどなく、 一部が中国のモチーフで多くは日本のモチーフであ ることは頻繁に指摘されてきた。vii紅型の制作者は どのようにして日本のモチーフを紅型に取り入れた のだろうか。はっきりとした答えはまだ出ていない が、そこには江戸と琉球の盛んな文化交流の影響が あったと推察される。そこで筆者は江戸で出版され ていた雛形本に着目した。雛形本と紅型の比較につ いては後述する。

#### IV. 構図について(雛形本の影響)

図案の模様は1枚の型紙では表すことができない 模様構成になっている。このように複数の異なる型 紙を組み合わせて絵羽模様にする衣裳は「鎖大模様 型(クサリウフムユウガタ)」と呼ばれている。鎖大 模様型の特徴は、同じ模様を反復するのではなく、 衣裳の肩から裾にかけて一単位の模様とし、一枚の 絵画のように構成されるところにある。型紙の組み 合わせによって、肩から背中にかけた部分と裾部分 に置かれる模様に分かれ、中間の腰部分にも型紙が 置かれる場合がある。鎖大模様型の紅型衣裳の制作

は非常に手間がかかるため、型紙1枚の繰り返しで 衣裳全体の模様を表す紅型衣裳の方が圧倒的に多 く、今日まで伝わっている数はそれほど多くはない。 長崎巌は「鎖大模様が型染紅型技法の成立当初から 存在していたとは考えにくく、大模様以下の、同模 様を反復するタイプの型染紅型が先行し、次第に組 み合わせる型紙が二枚、三枚と増やされていったの ではないかと考えられ、そうした過程で、能装束の 縫箔の意匠を手本とすることが行われた可能性があ る」<sup>™</sup>と述べている。長崎巌が指摘するように、鎖 大模様型の発生時期ははっきりわかっていないが、 近年の研究では、紅型の歴史の中では後期になって から成立したという考えが多くなってきている。従 来の一枚の型紙による反復では表現できない、大き な絵画を身にまとうような鎖大模様型の出現は、当 時としては画期的なことであったと想像できる。図 案の制作年を考える上で、鎖大模様型の紅型衣裳が いつ頃から制作されるようになったのか考える必要 がある。その明確な答えはまだ出ていないが、紅型 に表現される模様については、今までの先行研究で 唐織や友禅など日本の小袖意匠との共通性が指摘さ れている。ix

江戸時代に流行していた小袖デザインを知るため 重要な資料として小袖雛形本が存在する。この書籍 は、様々な小袖のデザインを掲載した出版物で、い わば江戸のファッション誌だった。主に町人の女性 が鑑賞用や、呉服店に注文をする際の参考書として 買い求めたと言われている。雛形本は、寛文六年 (1666) に刊行された『御ひいなかた』を筆頭に、 17世紀半ば過ぎから19世紀前半に至る約150年間 におよそ170から180種類も刊行された。江戸時代 の小袖の様式変遷を辿るうえで貴重な資料である。 筆者は雛形本に掲載された小袖雛形と鎖大模様形紅 型衣裳の比較を行い、その影響関係について考察し た。以下でその結果について述べる。

寛文七年(1667)刊行の『御ひいなかた』をはじめとした1600年代の雛形本には寛文期に流行した小袖、いわゆる寛文小袖の特徴が表れているものが多い。模様は全体的に右寄りに配置され、左裾に空白が空く構成が多く、模様の一つ一つが比較的大きく表される傾向がある。型紙の反復によりある種の規則性を持った紅型の模様構成とは違いがあ

る。紅型と比較した結果、一部模様の素材は共通していたが、その表現には違いがあるため、寛文小袖からの直接的な影響は認めることができなかった。



図6『新版花陽ひいなかた綱目』宝永五年(1708年)

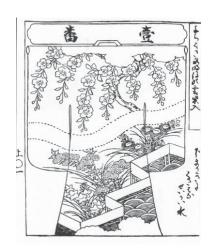


図7 『新撰当流相生雛かた』正徳元年(1711)



図8 『雛形祇園林』正徳四年(1714) 図6~8は、山辺知行 上野佐江子「小袖模様雛形本某成」 (学習研究社、1974) より転載

1700年以降に刊行された雛形本には、それまで の寛文小袖とは異なる傾向の意匠が見られるように なる。宝永五年(1708)に刊行された『新版花陽 ひいなかた綱目』図6においては、それまで全体に 広がっていた模様が上下に分かれ、肩の部分と腰か ら下の部分とで異なる模様を配置するデザインが掲 載されている。このようなデザインが制作されるよ うになった背景には、江戸時代になり和装がしっか りと帯を締めない着方から、幅のある帯を締める着 方に移り変わっていったことが影響していると考え られる。帯を締める部分には装飾が必要ないため、 その部分が空白となり模様が上下に分かれたことは ごく自然な流れであると言えよう。こうした模様が 上下に分かれた構成は、図案や他の鎖大模様型の紅 型衣裳の特徴と重なる部分がある。図案 図1と比 較すると、肩から垂れ下がる模様と裾から伸び上が る模様とモチーフの選び方が似通っている。筆者が 調べたところ、このような模様構成の小袖雛形は 『新版花陽ひいなかた綱目』だけではなく正徳元年 (1711) の『新撰当流相生雛かた』図7にも見るこ とができる。また正徳4年(1714)の『雛形祇園林』 図7にも鎖大模様型の特徴と共通する小袖雛形を確 認することができた。

また構図だけでなく、模様とその表現に着目する と『新撰当流相生雛かた』図7に掲載された小袖雛 形には、枝垂れ桜に霞がかかった表現が確認できる。 垂れ下がる模様に霞がかかる表現は、紅型において もしばしば確認できるものである。比較の結果、雛 形本に掲載された小袖には紅型の意匠表現と共通す る模様がいくつも発見できた。流水に菖蒲、籬に菊、 花丸文、笠松、網干、雪輪など挙げると枚挙にいと まがない。模様の素材のみならず、流水と菖蒲、籬 と菊といった模様同士の組み合わせや、その表現の 仕方にまで共通性が認められることは、特筆すべき ことだと言えよう。紅型と雛形本との間で類似した 模様表現が存在する理由は明らかではないが、江戸 時代の雛形本が琉球に渡り、衣裳をデザインする絵 師の目に留まっていた可能性があるのではないだろ うか。

ここまで雛形本が紅型に影響を与えた可能性について考察してきたが、雛形本そのものは琉球で確認されていない。しかし同時代に江戸で出版されてい

た書物が琉球列島で発見されている。それは絵手本 である。與那嶺一子によると、沖縄県多良間村に「享 保三年戊 五月吉日」と記された禽獣や草花の図案 集、いわゆる絵手本の版本が保管されているとい う。それがいつどのような形で多良間村に渡ったの か、その経緯は不明であるが、重要無形文化財「多 良間の豊年祭」の衣裳や小道具の模様を描くための 図案集として仲筋集落に残されているそうだ。この 絵手本は王国時代のものであったことは確認されて おり、與那嶺はこのような絵手本が、首里や那覇に もあった可能性があると指摘している。絵手本に記 されていた享保三年(1718)は江戸立(えどだち)で 慶賀使が江戸に派遣された年である。1710年代は 相次いで江戸立が行われた時期であり、紅型との比 較において共通性が確認できた雛形本の刊行年はこ の時期に集中している。xi

琉球と江戸との文化的交流の中で雛形本が琉球に持ち帰られ、日本へ対する興味や憧れから紅型衣裳の手本もしくは参考にされた可能性は十分考えられる。雛形本そのものでないにしても、琉球に江戸時代の小袖の意匠が伝わる方法は着物に仕立てられた形などいくつかの可能性があると考えられる。xiiいずれにしても琉球の王族や役人が江戸で人々の装いを目にしていたことは確実であるため、江戸の流行を映し出した雛形本と紅型意匠との共通性は、興味深いものだといえよう。

### V. 作者について

図案を撮影した鎌倉芳太郎は『沖縄文化の遺宝』 昭和五十七年(1982)の中で図案を描いた絵師に ついて見解を述べている。

「京都書院から『古琉球型紙』を発表した当時(昭和三十年頃)、私はこの図案を尚秦王(1848~1879)頃のものと推測した。しかしその後の研究において、ここに表現せられている花鳥絵の様式が、福州の画家孫億の風を伝えていることに気がつき、その点から見て、この衣裳図案の製作年代は、尚敬王(1713~1751)の時代、若しくはそれ以前にまで遡るのではないかと考えるに至った。」<sup>×iii</sup>

また鎌倉芳太郎は久米島真謝の喜久村家に伝わる 孫億画の「牡丹尾長鳥図」図9と図案の牡丹尾長鳥 を比較し「その表現の様式甚だ近似し同一画系のも のであることは明瞭である」と述べ、孫億に師事した山口宗季(呉師虔) \* iv が描いたのではないかと推察している。さらに家譜に山口宗季が王女国場翁主の婚礼衣裳の下絵を描いたことがあるとの内容があることから、確証はないとした上で図案を「伝呉師虔筆」として掲載している。



図9 孫億「牡丹尾長鳥図」(個人蔵)

改めて孫億筆の「花鳥画」と図案の牡丹尾長鳥を 比較すると、確かにその画風は似通っているといえ よう。写実的な花の描写からは絵師の技術が高い水 準であったことが伺える。しかし、細部を見ると必 ずしも酷似しているとは言えないのではないだろう か。添付資料(比較画像133頁)参照。まず牡丹を 見ると花の描写などは類似している。しかし、孫億 の花鳥図の牡丹の葉は丸みを帯びた形をしているの に対して、図案の牡丹の葉は先端が尖った形をして いる点が異なっている。また尾長鳥に目を向けてみ ると、孫億の尾長鳥の尾羽は長い二本のみが強調さ れ、残りは細く短く描かれている。図案の尾長鳥の 尾羽は二本以外も全体的に長く、扇のように広がっ ている。さらに図案の尾長鳥には描かれている冠羽 が、孫億の尾長鳥には描かれていない。師である孫 億の花鳥図と図案との比較により山口宗季の作だと する鎌倉芳太郎の説は少々無理があるように感じら れる。さらに山口宗季の「花鳥図」図10と比較し てみても牡丹や葉の描き方が異なっており、図案の 作者とするには疑問が残る。(図10は本稿付録とし て132頁に掲載。)

また仮に図案の作者が山口宗季だとすると、白地

牡丹尾長鳥流水菖蒲文紅型衣裳の製作年も山口宗季が活躍していた1700年前後だと推察される。しかし先にも述べたように、近年の研究では鎖大模様型の紅型衣装が製作されたのは紅型の歴史のなかでは後半になってからのことで、18世紀初頭はまだ発生していないと考えられている。

さらに近年、蛍光 X線による理化学調査が行われるようになった結果、紅型衣裳や絵画について今までは知り得なかった新たな発見がされている。その発見のひとつは、紅型衣裳の多くにプルシアンブルー(ベロ藍)が使用されていることである。プルシアンブルーは1704年にドイツで発明された鉱物性の人工顔料である。日本では江戸時代後半に輸入され、ベロ藍などの呼び名で葛飾北斎などの浮世絵に使用された。特に1830年以降、中国産の安価なプルシアンブルーが流通するようになってから頻繁に使用されたといわれている。\*\*

平成14・15年に行なわれた尚家染織品の染料・ 顔料の非破壊分析調査の結果、「白地牡丹尾長鳥流 水菖蒲文紅型木綿衣裳」図2の尾長鳥の背の部分と 流水部分の青にプルシアンブルーが使われているこ とがわかった。また「黄色地牡丹尾長鳥流水菖蒲文 紅型縮緬袷衣裳」図3は、肩の牡丹の葉の一部から プルシアンブルーの成分が検出されている。 x vi 他 にも当館や沖縄美ら島財団の所蔵品など、調査が行 なわれた紅型衣裳の多くにプルシアンブルーが使用 されていることがわかってきた。 x vii

では琉球ではいつからプルシアンブルーが使用されているのだろうか。文献史料の中に記録が見つかっていないので、はっきりとはわからないが、絵画作品のなかでは「間切図」にプルシアンブルーが使用されていることがわかっている。「間切図」は描かれている内容から、1781~1798年に制作されたと推定されている。よってこの頃には輸入されていたと考えられている。\*\*<sup>vii</sup>

鎌倉芳太郎が図案の作者だとする呉師虔(山口宗季 1672~1743)が描いた「関羽像」(1727年筆、沖縄美ら島財団所蔵)の、青い部分に使用されている色材は調査の結果群青だとわかっている。 xix またほぼ同時代の殷元良(座間味庸昌 1718~1767)の作品からもプルシアンブルーは検出されていない。こうした絵画の調査の成果から、彼らが

活躍していた時期には、まだ琉球ではプルシアンブ ルーが普及していなかったと考えられる。描かれた 図案と同時に制作された紅型衣装からはプルシアン ブルーが検出されていることを考えると、図案を描 いた絵師を山口宗季とするのは無理があるのではな いだろうか。では、誰が作者として考えられるか。 王家の紅型衣裳の図案を描く仕事を任されるという ことは、当時随一の腕を持った絵師が選ばれたと考 えられる。山口宗季に匹敵する活躍をした絵師とし て毛長禧(佐渡山安健 1806~1865) が挙げられ る。鎌倉芳太郎は毛長禧を呉師虔や殷元良らととも に首里王府画人五大家のひとりに数えている。毛長 禧は23歳の時には尚灝王の命に奉じて花鳥図を描 くなど、早くから王府宮廷の画家として活躍した。 また第18代尚育王の御後絵を描いたことをはじめ、 剥落した歴代の御後絵を修正するなど、重要な仕事 を任されていたという。多くの傑作を描き、王から 褒賞を受け取っていたことが『家譜』に記されてい る。安健が師とした向元瑚(小橋川朝安 1748~ 1841) は、福州に渡った経験もある南中国伝の技 法を受け継ぐ絵師である。安健の作品を見ると、そ の描線や着色、作風には孫億の流れを汲む福州絵画 の技法を習得していたことが推察され、図案を実見 した鎌倉芳太郎が述べていた内容と一致する。

毛長禧は複数の花鳥画を描いており「牡丹尾長鳥図」図11と衣裳図案を比較すると、その筆致、モチーフの一部に共通性が見られる。まず牡丹を見ると、孫億の描いた花鳥画では丸かった牡丹の葉先が、安健の場合は先端が尖った形に描かれている。これは図案の牡丹とも共通する。尾長鳥の姿も、2本のみ長い尾羽や先端の白点、頭部の冠羽などが似通っていると言えよう。そして牡丹、尾長鳥とともに菖蒲が描かれている点も注目に値する。天に向かって牡丹が咲き、真下には尾長鳥、そして足下には菖蒲が描かれるという配置は下絵図案と一致している。三つのモチーフに重点を置いた安健の「牡丹尾長鳥図」は他の絵師の作品と較べるとシンプルで洗練されており、そのまま紅型衣裳に転用できそうな印象を受け取る。

また同じく毛長禧の「鷹雀枯木芙蓉図」図12に は枯れ木にとまる鷹と飛翔する雀が描かれている が、枯れ木の下から垂れ下がるように咲く芙蓉は、



図11 毛長禧「牡丹尾長鳥図」 (沖縄美ら島財団蔵)



図12 毛長禧「鷹雀枯木芙蓉図」 (沖縄美ら島財団蔵)

図案の枝垂れるような牡丹を思い起こさせる。こうした表現は沈南蘋など中国系の画家の作品にも見られるものであるが、図案との関係性を感じさせる一端ともいえるのではないだろうか。以上のことから、毛長禧も図案を描いた可能性がある絵師の一人として考えられる。毛長禧が図案を描いたと仮定すると、「白地牡丹尾長鳥流水菖蒲文紅型木綿衣裳」図2の制作期は19世紀前半以降と考えられる。それは、先に述べたプルシアンブルーが流通する時期とも一致する可能性が高い。今後は琉球絵画の科学調査がされることで、より研究が進められると考えられる。図

案を描いた絵師については今後も考察を重ねていき たい。

## VI. まとめ

本稿では尚家に伝わった「黄色地紅型模様図案」 3領のうち、牡丹と尾長鳥、流水、菖蒲が描かれた 1 領の図案を中心に扱った。まず図案について概要 を述べた上、図案に描かれたモチーフを分析した結 果、「尾長鳥」はサンジャクをモデルとした綬帯鳥 であると指摘した。また図案が鎖大模様型の模様構 成であることから鎖大模様型の発生について考察 し、雛形本との比較によって江戸町人階級の小袖意 匠との共通性を指摘した。寛文期以降の雛形本には、 鎖大模様型の模様構成と表現される意匠に類似した 表現が確認できるが、現在鎖大模型の発生時期とし て考えられている18~19世紀とは半世紀ほど隔た りがある。この差をどう捉えるかは今後の課題とし、 より詳細な比較を行いたい。そして図案を描いた絵 師については、図案と花鳥図の比較ならびに最新の 科学調査から判明した紅型衣裳の制作時期から毛長 禧が図案を描いた可能性を指摘した。今回は1領の 図案を中心に考察したが、まだ不明瞭な点が多く、 更に研究が必要といえる。本稿が今後の紅型研究に 繋がる一端になれば幸いである。

本稿は学習院大学在学中に卒業論文として提出した内容を一部改訂したものです。執筆にあたっては、 多くの方にご指導ご鞭撻いただきました。心から感 謝申し上げます。

#### ・参考文献

- 山辺知行 上野佐江子『小袖模様雛形本集成』学習 研究社 1974年
- 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』岩波書店、1982年 津波古聡「絵画三題-殷元良・査丕烈・孫億-」『沖 縄県立博物館紀要 第十一号』沖縄県立博物館、 1985年
- 與那嶺一子「沖縄県立博物館所蔵紅型型紙の分類と その考察」『MUSEUM第四八九号』東京国立博 物館、1991年
- 與那嶺一子「紅型に置ける同一文様と紺屋の関わり について~「霞松大函梅模様」を例にした~」『沖

- 縄県立博物館紀要 第二十五号』沖縄県立博物館、 1999年
- 渡名喜明『沖縄の文化ー美術工芸の周辺からー』ひ るぎ社、1986年
- 『ニューワイド学研の図鑑 鳥』学研研究社、1999 年
- 下山進 高木秀明「琉球国惣絵図(間切集成図)に使用された色材の非破壊分析」『吉備国際大学社会学部紀要』12号 2002年
- 『沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵 鎌倉芳太郎資料集 第一巻 紅型型紙(一)』沖縄県立芸術大学付属研究所、2002年
- 『沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館所蔵 鎌倉芳太郎資料集 第二巻 紅型型紙(二)』沖縄県立芸術大学付属研究所、2004年
- 『鎌倉芳太郎資料集 (ノート編) 第一巻 美術・工芸』 沖縄県立芸術大学付属研究所、2004年
- 下山進 松井英夫「浮世絵版画に使用された青色着 色料の研究」『文化財情報学研究 第3号』2006 年
- 下山進 下山裕子「国宝「琉球王国尚家関係資料」 工芸品(染織資料等)の非破壊分析調査報告」『那 覇市歴史博物館紀要第1号』2009年
- 小林祥次郎編『江戸のイラスト辞典訓蒙図彙』勉誠 出版、2012年
- 長崎巌『小袖雛形』株式会社青幻舎、2009年 サントリー美術館『紅型 琉球王朝のいろとかたち』 2012年
- 早川泰弘 城野誠治「琉球絵画に使われている彩色 材料について」東京文化財研究所『琉球絵画光学 調査報告書』2017
- 一般財団法人沖縄美ら島財団 総合研究センター 琉球文化財研究室『首里城公園開館25周年記念 沖縄県立博物館・美術館開館10周年記念特別展 首里城の25年~平成の復元~』2017年

#### ・脚注

- <sup>1</sup> 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』岩波書店、1982年、 202頁
- "もう1領の図案(枝垂桜燕、流水に菖蒲)は同じ モチーフを描いた衣裳はあるものの、図案を元にし たことが明らかな衣裳が残されておらず、他の2領

とは筆致が異なり作者が同一でない可能性がある。 "「黄木綿地菊牡丹雲尾長鳥模様紅型衣裳」(東京国立博物館所蔵)や「霞に牡丹尾長鳥流水菖蒲文様衣裳」日本民藝館所蔵など、尚家伝来衣裳以外にも、ほぼ同一の特徴を持つ尾長鳥が描かれた衣裳は数多く存在する。

iv 寛文六年(1666) に刊行された日本で最初の図解博物事典といわれる。

\*全105巻。寺島良安著。正徳二年成立。中国の「三才図会」にならい和漢古今の万物を掲げ、漢文で解説を施して図解した江戸時代の百科事典。

" もともとはペルシャで王権を象徴する「真珠の首飾りをくわえた鳥」の模様だったと言われており、オウムの姿で表された。これが中国に渡り、中国で官位を象徴する「綬帯をくわえた鳥」の模様に変化した。(長崎巌「日本の吉祥模様」『民藝一月号 第六八五号』2010年、14項~17項)

<sup>\*ii</sup> 與那嶺一子「沖縄県立博物館所蔵紅型型紙の分類 とその考察」『MUSEUM第四八九号』東京国立博 物館、1991年

\*\*\*『紅型 琉球王朝のいろとかたち』サントリー美術館、2012年、13項

x 長崎嚴『小袖雛形』株式会社青幻舎、2009年

xi 江戸立が1710年、1714年、1718年と短い期間の間に数回行われている。

xii 江戸において雛形本の受容者は被支配階層であった。紅型が王族・士族のためのものであったことを考えると雛形本が手本となることに多少の違和感が生じる。しかし、琉球において異国である江戸の身分制度は意味をなさなかった可能性も考えられる。

あるいは雛形本が琉球において参照される際、遠い 異国の素材が純粋にモチーフとして切り取られただ けとも考えられる。

x<sup>iii</sup> 前掲 i 、202頁

\*\*\* 山口宗季(呉師虔 1672~1743)は20歳で絵師に登用され、31歳で福州に渡って孫億、順梁亨、鄭大観に絵を学んだといわれている。帰国後は首里王府で絵師として活躍し、近衛家熙や島津内膳の求めに応じて花鳥図を描いた記録がある。また尚豊王、尚質王の御後絵を描いたことも知られており、当時最も活躍する絵師のひとりだったことがわかる。代表作として「神猫図」(那覇市所蔵)や「花鳥図」(大和文華館所蔵)があり、優美な花鳥図を得意とした絵師である。

\*\* 下山進 松井英夫「浮世絵版画に使用された 青色着色料の研究」『文化財情報学研究 第3号』 2006年

xvi 下山進 下山裕子「国宝「琉球王国尚家関係資料」 工芸品(染織資料等)の非破壊分析調査報告」『那 覇市歴史博物館紀要第1号』2009年

\*\*<sup>\*\*</sup> 当館が平成27年度から行っている琉球王国文化 遺産集積-再興事業に伴う調査などで明らかになっ てきている。

x viii 下山進 高木秀明「琉球国惣絵図(間切集成図) に使用された色材の非破壊分析」『吉備国際大学社 会学部紀要』12号 2002年

\*ix 早川泰弘 城野誠治「琉球絵画に使われている 彩色材料について」東京文化財研究所『琉球絵画光 学調査報告書』2017年

図1 黄色地紅型模様図案(牡丹尾長鳥、流水に菖蒲)(鎌倉芳太郎撮影/沖縄県立芸術大学蔵)

表



裏



# 図2 白地牡丹尾長鳥流水菖蒲文紅型衣裳 (那覇市歴史博物館蔵)

表



裏



図10 山口宗季(呉師虔)「花鳥図」(大和文化館蔵)



図9 孫億「牡丹尾長鳥図」 (個人蔵)



図11 毛長禧「牡丹尾長鳥図」 (沖縄美ら島財団蔵)



図12 毛長禧「鷹雀枯木芙蓉図」 (沖縄美ら島財団蔵)



添付資料(比較画像)

冰门真科 (比较画像)	牡丹の花	牡丹の葉	尾長鳥
①黄色地紅型 模様図案			
山口宗季 (呉師虔) 「花鳥図」			
孫億「牡丹尾長鳥図」			
毛長禧「牡丹尾長鳥図」			

山口宗季「花鳥図」には尾長鳥が描かれていないため別の鳥を掲載した